

[招待論文：実践報告]

英国代表チーム事前キャンプにおける スポーツボランティア 「KEIO 2020 project」の取り組み “KEIO 2020 project” Initiatives on the Pre-Games Preparation Camps of the British Teams

稲見 崇孝

慶應義塾大学体育研究所専任講師

Takayuki Inami

Senior Assistant Professor, Institute of Physical Education, Keio University

福土 徳文

慶應義塾大学体育研究所専任講師

Norifumi Fukushi

Senior Assistant Professor, Institute of Physical Education, Keio University

東原 綾子

慶應義塾大学体育研究所助教

Ayako Higashihara

Assistant Professor, Institute of Physical Education, Keio University

永田 直也

慶應義塾大学体育研究所専任講師

Naoya Nagata

Senior Assistant Professor, Institute of Physical Education, Keio University

坂井 利彰

慶應義塾大学体育研究所准教授

Toshiaki Sakai

Associate Professor, Institute of Physical Education, Keio University

須田 芳正

慶應義塾大学体育研究所教授

Yoshimasa Suda

Professor, Institute of Physical Education, Keio University

村松 憲

慶應義塾大学体育研究所教授

Tadashi Muramatsu

Professor, Institute of Physical Education, Keio University

村山 光義

慶應義塾大学体育研究所教授

Mitsuyoshi Murayama

Professor, Institute of Physical Education, Keio University

石手 靖

慶應義塾大学体育研究所教授

Yasushi Ishide

Professor, Institute of Physical Education, Keio University

小山 亜希子

慶應義塾女子高等学校教諭

Akiko Koyama

Teacher, Physical Education Department, Keio Girls Senior High School

中川 一紀

慶應義塾普通部教諭

Kazunori Nakagawa

Teacher, Keio Futsubu School

Abstract: 慶應義塾大学(日吉キャンパス)は横浜市、川崎市とともに東京 2020 オリンピック・パラリンピックに出場する英国代表チームを受け入れる。本編では、その際に躍動する学生ボランティアを養成するための教育プログラム【KEIO スポーツレガシー】を実践する組織「KEIO 2020 project」の活動を紹介する。

Keio University will join Kawasaki City and Yokohama City in hosting the pre-Games preparation camps of the British teams in the run up to the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games. In this paper, we will introduce the practical activities of the “KEIO 2020 project”, an organization that practices an educational program [KEIO Sports Legacy] to train student volunteers who will be active at the pre-Games preparation camps of the British teams.

Keywords: 教育プログラム、スポーツレガシー、慶應義塾大学
education program, sports legacy, Keio University

1 はじめに

2013 年 9 月 8 日、アルゼンチン・ブエノスアイレスで行われていた国際オリンピック委員会 (IOC) の総会にて、2020 年の夏季オリンピック・パラリンピック競技大会の開催地が東京に決定した。その東京 2020 オリンピック・パ

オリンピック競技大会（東京 2020 大会）の開催前に行われる各国の事前キャンプにおいて、慶應義塾大学は横浜市・川崎市とともに英国代表チームを受け入れることとなった。3 ホストは、2017 年 3 月に英国オリンピック委員会（BOA）と、2018 年 5 月には英国パラリンピック委員会（BPA）と、それぞれ事前キャンプに関する覚書締結式を行っている。ホストユニバーシティとして、英国チームとどのような交流ができるのであろうか。日吉キャンパスを拠点として事前キャンプを行う競技種目の中には、体育会学生らがともにトレーニングができる貴重な機会もあるだろう。スポーツを「する」よりも「みる」もしくは「支える」側面から楽しみたい一般学生との交流はどうであらうか。

東京 2020 大会にスタッフとして参加する方法のひとつにボランティアがあり、一般には、大会組織委員会の大会ボランティアと、競技会場の所在地となる自治体が募集する都市ボランティアの 2 つの選択肢がある。慶應義塾大学の学生にとって、事前キャンプボランティアは第 3 の選択肢となり得る得難い機会であり、その相手国が偶然にもボランティア発祥の地「英国」であることは大変興味深い。ロンドン 2012 オリンピック・パラリンピック競技大会（ロンドン大会）において格別な働きをもって躍動したボランティア大国の英国が日吉キャンパスを拠点に活動するにあたり、体育研究所では東京 2020 大会終了後も見据えた長期的な価値を創造することを目的として、事前キャンプボランティアを行う団体「KEIO 2020 project」を 2016 年に組織し、集学的な教育プログラム【KEIO スポーツレガシー】を推進している。本編では、ロンドン大会における英国のボランティア政策を整理するとともに、2020 年までに育成した学生を英国事前キャンプへと接続するために実践している KEIO 2020 project の活動について報告する。

2 英国とボランティア

「volunteer（ボランティア）」の語源は、ラテン語の「volo（欲する）」とされる。17 世紀中頃の村や街を守る自警団に参加する人や、18 世紀の植民地を守るために自ら進んで軍隊に入る志願兵、これらが「volunteer」という用語のはじまりであり、いずれもルーツは英国にある。偏にボランティアと言っ

ても、近年では多様化が進み、災害ボランティアから国際交流ボランティア、環境ボランティア、地域ボランティア、スポーツボランティアなど多岐にわたっている。本編が該当するスポーツボランティアの中においても、日常一般的に行われるスポーツボランティアと一生涯のイベントであるオリンピック・パラリンピック大会ボランティアの間には概念の違いがある (HM Government and Mayor of London, 2014; Sports England, 2016)。しかしながら、KEIO 2020 project の基本理念と活動のフレームワークを確立するにあたり、ボランティア発祥の地の文化を念頭におき準備を進めることに疑念はない。

ロンドン大会におけるボランティアのリクルート・育成に関わる政策的取り組みについて、まず紹介すべきなのは大会運営ボランティア「Games Makers」である。Games Makers のリクルート・育成は、ロンドン大会組織委員会の責任のもと、委託を受けた大会スポンサーのマクドナルド社によって行われている。金子 (2017) によれば、2010 年 9 月 25 日から 10 月 31 日までの 5 週間ほどで 24 万人を超える応募があり、最終的に 7 万人が Games Makers に採用されている。採用された人々は 2012 年 2 月からの講習会・ワークショップでのトレーニングを経て大会運営に携わっている。加えて、開催都市であるロンドンや競技実施会場となった他の自治体においては、多くの観光ボランティアが採用された。ロンドンでは、「Team London Ambassadors」プログラムがロンドン市長を中心に開始された。またサッカーの競技実施会場となったマンチェスターでは「Manchester Ambassadors」、セーリングの競技実施会場となったウェイマスとポートランドでは「Weymouth and Portland Ambassadors」というボランティアプログラムが展開された。いずれもリクルートするだけでなく、育成するまでをセットにしたプログラムとなっており、これら一連の教育プログラムは後に大会のレガシーとして社会で活用された背景もある。一例に「Personal Best Program」がある。このプログラムは、社会で必要とされる「生き抜いていくために必要な基本的なスキル (生きる力)」を長期失業者が身に付ける機会として提供されている。ボランティアをきっかけとした社会体験、準備・心構えづくりという観点では、大学生にとっても類似するものであり、有用であろう。一方、リクルートに関するシステムティックな側面では「Join In」や「Team London」などのボ

ランティアの登録・検索システム整備があり、市民がボランティアへ容易に参加しやすい環境が整えられている。ボランティア教育プログラムの骨子となるリクルートは【量】を、育成は【質】をそれぞれ意味しており、KEIO 2020 project のフレームワークを決定・推進する上で両者を踏襲したプログラムデザインがよいモデルとなる。これにより、ロンドン大会のレガシーと KEIO スポーツレガシーを接続するよい機会となるだけでなく、【生きる力】が備わる学生教育に結実すると考えている。実際、災害ボランティアなどをはじめとした多くのボランティア現場においては、自主性・主体性が強く求められており、ホストユニバーシティとしてスポーツボランティアに参画する機会の構築は、「アクティブ・ユニバーシティ (活気に満ちている大学)」を促進する契機となり得る。

3 ロンドン大会におけるホストユニバーシティの活動

British Council のレポートによれば、大学がオリンピック・パラリンピックのパートナーになることについて、1) 様々な行事が行える広いキャンパスやセキュリティが整っていること、2) トレーニング用のスポーツ施設や場合によって宿泊施設があること、3) 研究者が在籍していること、4) 医療体制が整備されていること、5) 地域文化および社会的立場が開かれていること、など様々な側面から適していると述べられている。ジャマイカ代表チームは、ロンドン大会の事前キャンプをバーミンガム大学で行っている。陸上短距離競技で複数の金メダルを取得した同国代表のウサインボルト選手が「全てはバーミンガム大学のおかげです」と伝えたことは、後のバーミンガム大学における世界大学ランキングの躍進に一役買っており、捉え方によっては大学側にも複数のメリットがある。他にも、ロンドン大会ではロンドン中心部と南東部の地域で多くのホスティングが行われている。前述のレポートでは、イーストロンドン大学やロンドン大学クイーン・メアリー校のようにスタジアム近くの大学は最先端に行くスポーツセンターの開設や大会を通した理学療法役割を請け負っている。また、スポーツ科学領域の大学研究者らは国際共同研究の加速化や学際的な取り組みの拡大 (工学や海洋学など)、知見の提供などによって内外に対するその価値を高めた。シェフィールドハラム大学の

スポーツ科学研究者らは、「アスリートやボランティア、地域住民など多くの人がスポーツと科学を考え、それらを関連付けさせる相互的な経験になった」と述べている。一例として、「サメの革でできたスイミングスーツを着ると本当に早く泳げるのか？」というプロジェクトがあり、大学を拠点とした研究ながらも一般市民が興味関心を抱きやすい配慮が窺える一面もある。一方、興味深いことに遠方の大学がロンドン近郊の大学より深い関わりを持っていたことも報告されている。例えば、メインのロンドンスタジアムから約1時間離れた場所に位置するロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校は2つあるロンドン大会衛星都市の一つに選ばれ、世界のエリートボート選手やカヌー選手をキャンパスに受け入れている。ボートのイベントに参加する選手やスタッフの合計1,400人あまりを迎え入れたことになる。つまり、物理的な距離の問題ではなく、ビジョンや施設が明確であればより多くの機会が得られることを意味しており、地域連携としてリーズ大学が中国チームをホストするために市の議会と協力したように、地域との連携が重要であることを示唆している。2020年の英国事前キャンプにこれらの事例を置き換えると、慶應義塾大学は横浜市や川崎市と連携することになるわけだが、拠点となる日吉キャンパスという視点では横浜市港北区や日吉商店街などと協力していくことがロンドン大会の知見と一致することになる。

4 KEIO 2020 project

上記、ロンドン大会の背景や英国ボランティア文化を参考として、体育研究所はKEIO 2020 projectを組織し、プログラム目標を【生きる力】の獲得に設定した。これは日本の経済産業省が推進する「社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）」の育成と共有できる点も多い。2020年の当該期間におけるボランティア参加手順に関しては、英国から提供されるプログラムに準ずる必要があるものの、プログラム開始までにまずリクルート【量】を先行し、同時進行で育成【質】を推進する必要がある。本学に体育学部やスポーツ科学、健康科学部といった専門学部がないことから、活動の早期スタートは望ましく、活動の早期スタートはBritish Councilのレポートの中でも提言されている。しかしながら、笹川スポーツ財団が提供す

るスポーツライフ・データ 2019 (笹川スポーツ財団, 2019) にある我が国のスポーツボランティア実施率によると、過去 12 ヶ月の間にスポーツに関わるボランティア活動を行った人の割合のピークは 2010 年の 8.4% であり、1994 年の 6.1% から 10% 以下を例年推移している状況である。英国ではどうかというと、同様の問いに関するピークは 2008 年の 21.3% であり、2005 年から 2015 年まで 19.1 ~ 21.3% の推移となる (金子, 2017)。なお、英国で「スポーツに関わるボランティア活動」という用語を除き、過去 12 ヶ月の間の「ボランティア活動」に関する実施率を調査すると、そのピークは 2012 年の 25.9% であり、英国国民の 1/4 が 1 年の間に何かしらのボランティア活動を行う文化を有する。日本とは文化が異なる背景はあるものの、得難いこの貴重な機会に「2020 年までに何をしたいか?」を学生自らが考え、主導的に行うこと、そしてそのプロセスにおいて、大学教員が多面的かつ包括的にサポートできる集学的な教育プログラムの仕組み作りとコンテンツの充実が KEIO 2020 project を推進する上で重要であろう。以下、KEIO 2020 project の概要を示す。

4.1 コンセプト

KEIO 2020 project に設立当初から関わる学生らが中心となり、3 つのコンセプトを掲げた。

- A) 選手をベストなコンディションで選手村へ送り出す
- B) 横浜市・川崎市とともに地域を盛り上げる
- C) 日本 (文化) の魅力を伝える

熟考・再考を繰り返した上で決まったコンセプトである。オリンピック憲章にもあるように、メダル獲得はもちろん、オリンピック・パラリンピックが開催される地域への貢献や文化交流をコンセプトに含めている。なお、2017 年 3 月の BOA との覚書締結式において近代五種、ボクシング、テコンドー、柔道、卓球、ホッケー、ウェイトリフティング、バスケットボール、バドミントン、体操、空手、アーチェリー、フェンシングの 13 競技の事前キャンプが予定されている。今後、出場選手の有無に応じて、またキャンプ日程に応じて変更があり得るだろう。

4.2 プログラム推進のための資金

KEIO 2020 project のフレームワークが定まったのち、コンテンツの充実を目指した複数の講習会・ワークショップ（後述）を計画した。これらの講習会・ワークショップは、2020 年までに推進するアジェンダにおいて効果的な時期を見定めながら配置した。こうして計画した集学的な教育プログラムを塾内の未来先導基金 (<http://www.dff.keio.ac.jp/index.html>) に応募し 3 年連続で採択されている。2018 年度は「KEIO スポーツレガシー 東京 2020 オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】」、2019 年度は「KEIO スポーツレガシー 東京 2020 オリンピック・パラリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】」、2020 年度は「東京 2020 オリンピック・パラリンピック英国サポート【KEIO 2020 project】を通じた KEIO スポーツレガシーの共創」として採択されている（共に研究代表者体育研究所所長石手靖教授）。ホストユニバーシティとしてボランティア教育を行う上で、上述のように専門学部のない本学においては、スポーツ社会学や福祉などスポーツボランティア教育に関する専門家を招聘するなどして後述する講習会・ワークショップを推進するための主たる財源としている。

4.3 リクルート【量】と組織づくり

日本の学生が多く利用している SNS アプリ「LINE」を情報共有ツールとして活用している。具体的には英国の「Join In」や「Team London」を参考に、学内に掲示するチラシやポスターに QR コード等を記載し、興味のある学生がアクセスしやすく、また情報をキャッチすることでボランティア登録できるシステムづくりを目指している。「公式 LINE」と呼ばれる有料のコンテンツを利用し、増加する登録数へ対処している。こうして登録した学生の中から、自らがギアになり、KEIO 2020 project が推進する講習会やワークショップの企画・運営に携わることを希望した学生を運営委員に任命し、月に 2 度、運営委員会を行っている。運営委員となった学生は広報・通訳翻訳・渉外・会計の 4 部署の中から希望の部署を選択し担当する。広報部であれば、イギリスチームも活用する Facebook や KEIO 2020 project で運用している LINE

など SNS の情報公開を担当する。通訳翻訳部は、SNS で公開する内容やプレゼンテーション資料の英語化を、渉外は KEIO 2020 project に関するプレゼンテーション資料作成や資料素材の管理、塾内外への PR 活動を、会計部は上記資金の運用方法を教員と連携しながら勘案する。運営委員の中の数名はメインメンバーとしてさらに組織を円滑に稼働させる。組織の全体像は図 1 の通りである。なお、運営委員を希望した学生に関しては、入会時にアンケートを実施している。富士ら (2019) は、アンケートの記述内容をテキストデータへ変換し、テキストマイニング法 (KH Coder for Mac) を用いて分析しており、以下のようにまとめている。分析は、各設問の頻出語に対して KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを用い、出現パターンの似通った語 (すなわち共起の頻度が強い語) を線で結んだネットワークを描いてまとめている。強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描出され、語の色分けは「媒介中心性」(それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す) によるものであり、白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示している。

Q1 として「英国サポートを通じて何をしたいですか?」というアンケート

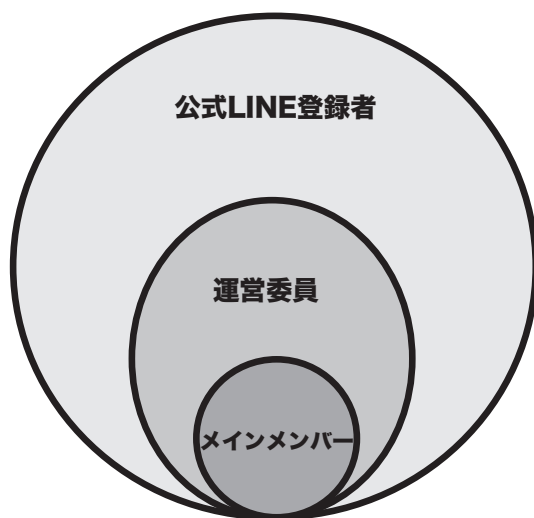


図 1 KEIO 2020 project 組織図

をテキストマイニング法にて解析した結果、図2のような結果が得られている。図2からは、自身が学生である期間に日本でオリンピックが開催されるこの機会を生かし、ボランティアをするだけでなく、歴史を知り、地域に貢献したい、またイギリス選手のサポートをすることでこれまで接する機会がなかった異文化圏の人々との交流を経験したい、と考える学生が KEIO 2020 project に参加していることが理解できる。また同様の手法にて Q2「他者と議論を交わしながら実践していく機会において重要かつ必要な能力は何だと思いますか?」、Q3「自国・他国を含めた文化の理解を進めるグローバル化・

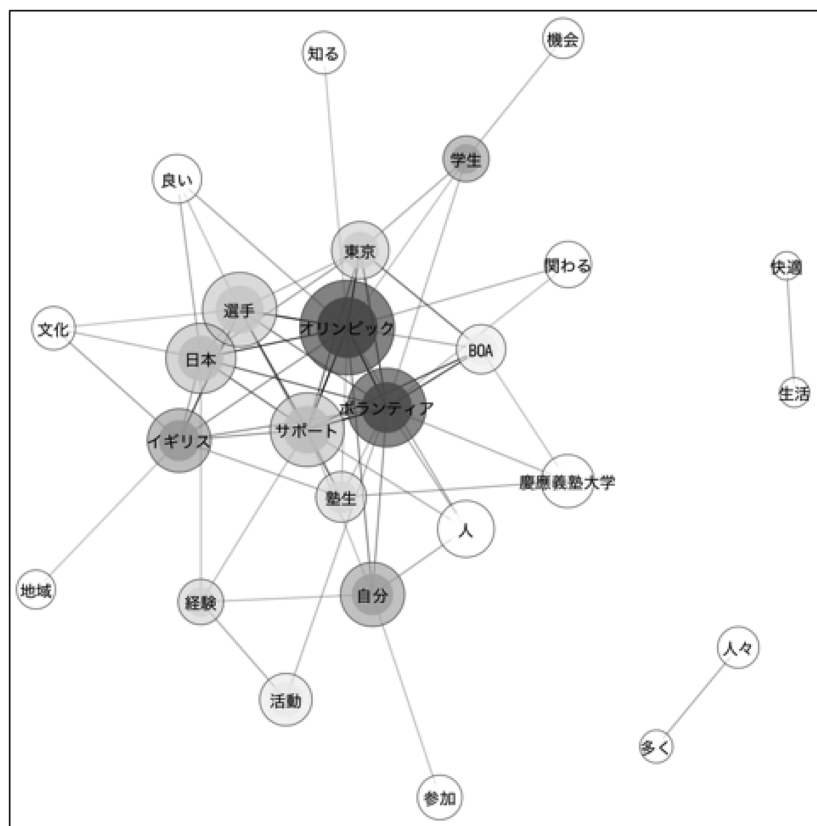


図2 「英国サポートを通じて何をしたいですか?」の質問に対する回答をテキストマイニングした共起ネットワーク

国際化のために必要な能力は何だと思いますか？」の結果を解析したところ、図3および図4のような結果が得られている。図3からは、自身の意見を主張する能力、他者の意見に耳を傾け尊重する能力、また両者の意見の落とし所を見つけて合意形成を図る能力が必要で、なおかつ他者の意見をしっかりと理解する力、必要となる行動力を考え求める学生がいることが理解できる。同様に図4からは、自身の価値観とは異なる価値観を受け入れる能力と英語力を基盤としたコミュニケーション能力、特に積極的に話す能力を求める学生がいることが報告された。こういった視点の背景には、自身の経験として

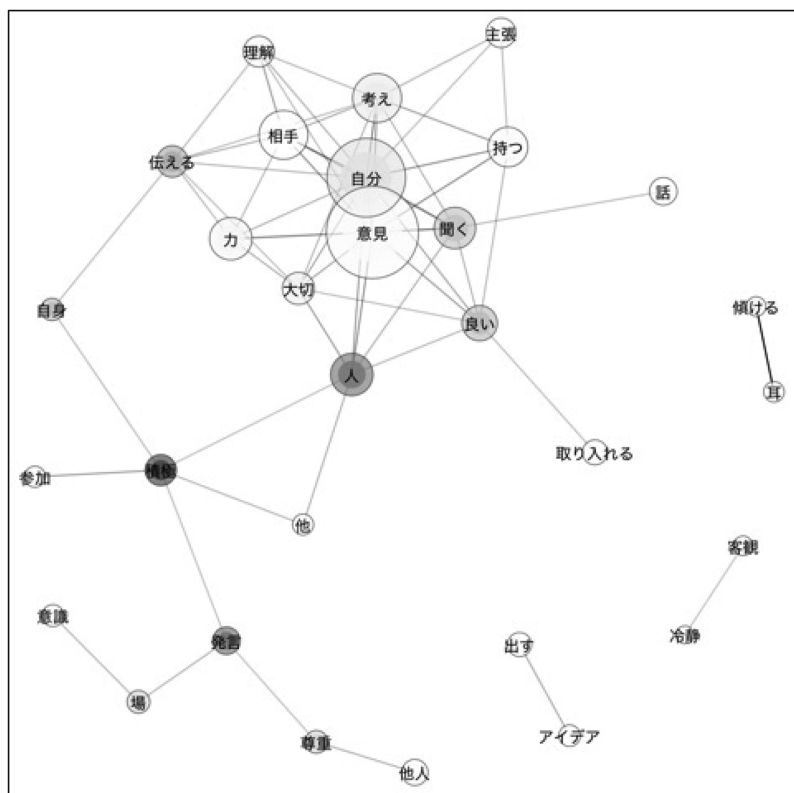


図3 「他者と議論を交わしながら実践していく機会において重要かつ必要な能力は何だと思いますか？」の質問に対する回答をテキストマイニングした共起ネットワーク

国際性を重要視しているという認識があることが読み取れる。全体として女性性が8～9割という組織構成も大変興味深いものであった。発足時10名足らずであった登録数は、右肩上がりに数を伸ばし、2019年11月末日現在、1069名となっている(図5)。

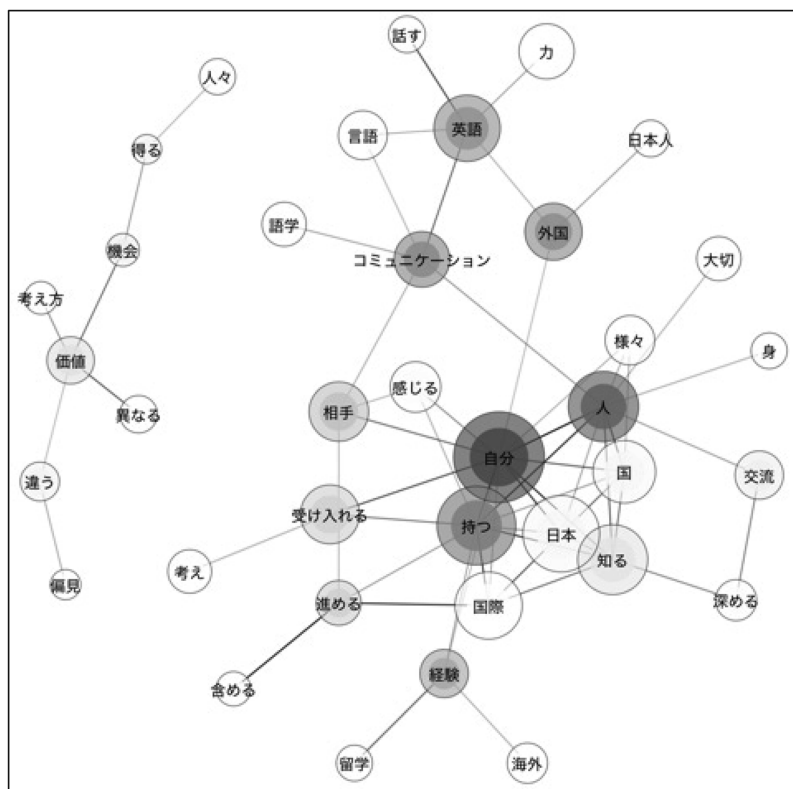


図4 「自国・他国を含めた文化の理解を進めるグローバル化・国際化のために必要な能力は何だと思いますか?」の質問に対する回答をテキストマイニングした共起ネットワーク

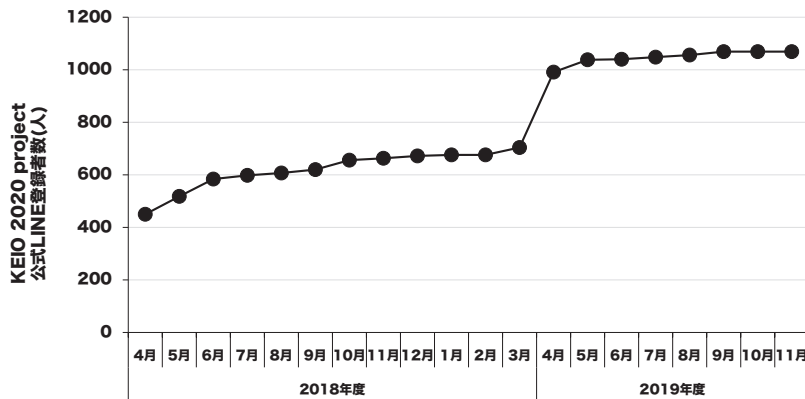


図5 KEIO 2020 project への登録をしている学生の推移

4.4 育成【質】：講習会・ワークショップの開催

2019年11月末日までに、表1の講習会・ワークショップを開催している。大小規模は異なるが、手探りながらも生きる力の獲得に向けて実施している講習会・ワークショップの数は50件を超える。講習会・ワークショップの開催に至るまでの進め方に関して、2018年に実施した「Universal Event シットティングバレーボール」を事例に提示する。社会体験・社会実践の場の模擬経験を通じて、英国チーム受け入れの際の一助となり、英国サポートを通じて磨かれたスキルが社会実装されることを期待してデザインされたプログラムである。このイベントは東京2020大会公認プログラムとして認定を受けている。

1. 事前に、上述の資金から捻出する講習会・ワークショップ、その他 KEIO 2020 project として計画する年間のイベントを年度毎にまとめ、計画的に運用する実現可能性の高い年間スケジュールを検討・作成している。運営委員のメンバーは、原則としてスケジュールに沿ってアクションを起こす。事例として取り上げる Universal Event も前年度には開催が決まっている。スケジュールが決まった段階でいくつかのイベントを推進するリーダー2～3名と、当日まで共に

表 1 KEIO 2020 project の活動の一覧

年	No.	イベント名	日時	場所	備考
2017	1	東京五輪五輪-2020-神奈川県撮影	10月16日	日吉田記念館	https://www.youtube.com/watch?v=CWGZTct4aA0
	2	マナー講習会	10月26日	体育研究所会議室	協力 株式会社中北薬品 名刺の渡し方など
	3	防衛パネルアート制作	11月初旬～下旬	体育研究所共同研究室	記念館工事中の工事用パネルへ添付するシール
	4	高円宮杯フライングW杯東京大会観戦	11月12日	世田谷	フルレートを観戦
	5	川崎プレザーススポーツボランティア説明会	12月1日	等々力競技場	ボランティア体験
	6	アシックス社とミーティング	12月18日	体育研究所共同研究室	スポーツマーケティング統括部
	7	川崎市とミーティング	12月28日	体育研究所会議室	市民文化局
2018	8	神奈川県とミーティング	1月15日	体育研究所会議室	バラスポーツ推進拠点
	9	横浜市とミーティング	1月23日	体育研究所共同研究室	反政推進課
	10	国立スポーツ科学センター (JISS) 視察	2月5日	赤羽	宿泊施設や館内の案内方法について学ぶ
	11	British Council (BC) レポート翻訳	2月14日	体育研究所・メディアセンター	BCによるロンドン大会のレポートを翻訳
	12	山形県上山市市長来訪	2月22日	体育研究所会議室	現在の取り組みについて発表
	13	3カストボランティアミーティング	2月23日	体育研究所共同研究室	横浜市と川崎市の担当者参加
	14	ボッチャ体験会	3月3日	協生館エクササイズスタジオ	神奈川県と開催 地域施設から多数の参加者
	15	入学センターパンフレット撮影	4月2日	体育研究所共同研究室	大学公式パンフレットに掲載
	16	JTB社とミーティング	4月17日	体育研究所共同研究室	教育第一事業部 JTB総研
	17	BOAによる日言報のサポート	5月14日	日吉キャンパス	職員のに続きタレントをサポート
	18	公開講座Thinkサッカー“データからサッカーを考える”	5月19日	日吉陸上競技場	読売新聞社との共同公開講座
	19	BPA締結式のサポート	5月24日	協生館	締結式を裏方としてサポート
	20	東京観光ガイド2018	6月9日	明治神宮～浅草～六本木ヒルズ	国際センターとの企画 留学生に日本文化を発信
	21	University of British Columbiaの文化交流会	8月17日	下田グラウンドと来住舎	体育会野球部とともに日本文化を発信
	22	嵐王坊平賀会館 (近江五福日本代表チームとの交流)	8月28日・29日	坊平アスリートビレッジ	近代五種日本代表スタッフらからサポート法を教授
	23	英国視察2018	9月5日～11日	ロンドン・ケンブリッジ大学	BOA・BPAからの施設案内と意見交換 大学視察
	24	英国パラ水泳チームと横浜市小学校との交流サポート	9月21日	横浜国際プール	パラ水泳チームと小学校の交流をサポート
	25	BOAレクチャーシリーズ第1弾	10月19日	協生館国際記念ホール	受付と会場整理を担当
	26	2018.ふるさと港北ふれあい祭り	10月20日	横浜市ふれあい祭り会場	英国事前キャンプPRブースにて英国文化を発信
	27	横浜 マラソン2018	10月28日	みなとみらい	メガスポーツイベントにてボランティア体験
	28	第24回都民区民まつり	11月3日	都民区民祭り会場	英国事前キャンプPRブースにて英国文化を発信
	29	ひよしマップ作成説明会	12月21日～	体育研究所会議室	商店街の方々と打ち合わせ 以降マップ作成開始
	30	Fish'n' chips	1月15日～30日	日吉大学生協食堂	学食とコラボし英国を代表するfish&chipsを提供
2019	31	ユニバーサルイベント (シッピングバレーボール)	2月6日	横浜市立白根小学校	リクルート社・横浜市とともに公設プログラム化
	32	マナー講習会	2月19日	体育研究所会議室	協力 株式会社中北薬品 名刺の渡し方など
	33	港北区スポーツフェスティバル	2月21日	来住舎	KEIO 2020 projectの取り組みを発表
	34	Welcome party @ Keio Challenger	2月24日	武蔵小杉リッチモンドホテル	総務部と連携し日本文化発信と会の運営を体験
	35	東京マラソンボランティア体験	3月3日	東京都各所	アシックス社とともにボランティアを体験
	36	Think Universal “車椅子レクチャー”	3月12日	協生館	車椅子への乗り方、押し方、サポートを学ぶ
	37	心理学 中野教授とミーティング	5月9日	第8校舎	日吉バリアフリーマップ作成のキックオフ
	38	体育会主催連絡会で発表	5月10日	三田キャンパス	英国事前キャンプのサポートについて
	39	協生館環境推進室とミーティング	5月17日	三田キャンパス	バリアフリーマップの作成について
	40	東京観光ガイド2019	6月3日	明治神宮～浅草～六本木ヒルズ	国際センターとの企画 留学生に日本文化を発信
	41	2019.ふるさと港北ふれあい祭り	6月1日	横浜市ふれあい祭り会場	英国事前キャンプPRブースにて英国文化を発信
	42	日吉英国1年前イベント (メディア)	7月1日	協生館ラウンジ	英国チームのキャンプ前にラウンジを英国色に
	43	BOAによる日言報のサポート	7月3日	日吉キャンパス	職員のに続きタレントをサポート
	44	公開講座Thinkラグビー ラグビーW杯を100倍楽しむ!	7月6日	協生館	読売新聞社との共同公開講座
	45	日吉英国1年前イベント (メディア)	7月12日～31日	日吉メディアセンター	機運向上を目的に英国関連書籍の展示をサポート
	46	英国 (BOA) 体操チームのサポート	7月8日～9日	横浜体育館	体育会器械体操部と連携し掃除や準備のサポート
	47	英国 (BOA) 水泳チームのサポート	7月16日	協生館プール	体育会水泳部と連携
	48	日吉商店街×英国大使館訪問大会	8月3日	日吉台小学校	最寄り小学校にて機運醸成をPR
	49	港北区駅連検スタート	9月号	横浜市港北区	毎月関連情報を掲載 アクセシビリティを学ぶ
	50	英国 (BOA・BPA) 柔道チームのサポート	8月21日～23日	日吉体育館柔道場	体育会柔道部と連携し掃除や片付けなどサポート
	51	横浜 マラソン2019	11月10日	みなとみらい	メガスポーツイベントにてボランティア体験
	52	英国視察2019	11月19日～25日	ロンドン・ラフバ大学	BOA・BPAからの施設案内と意見交換 大学視察
2020	52	日吉British Weekのためミーティング	1月14日	体育研究所会議室	5/10のイベントに備え港北区や商店街等と打合せ

準備を進めるメンバーを各部署から数名ずつ選出・構成し、SNSアプリ「LINE」上でグループを構成する。

- リーダーとなる学生が中心となり開催時期を勘案し、より実現可能性を高め、質の高いイベントを計画できるよう教員と開催時期と内容に関する複数回の打ち合わせを実施する。

3. 一般企業に所属するパラアスリートに白羽の矢を立て、教員が事前にコンタクトを取る。この際、先方担当者に KEIO 2020 project のコンセプトについて事前にお伝えし、了承を得ている。
4. キックオフミーティングの時期が決まると、グループ内にいる渉外部の学生が KEIO 2020 project に関する説明スライドを作成する。複数回にわたって教員との間で添削を行い、発表練習を繰り返すことが多い。なお、マナーインストラクターによるマナー講習会を別イベントで開催しており (図 6a)、名刺の渡し方や上座下座の理解についても予習している。
5. 一般企業の担当者およびパラアスリートとの打ち合わせでは、当該時間に授業のない学生も参加し、会議を体験する (図 6b)。渉外部の学生はスライドを用いて発表し (図 6c)、リーダーは今後の進め方などについても詳細を詰める。会計部の学生はどの程度の消耗品などが必要になるかについて試算する根拠を得る。
6. 会議後、先方企業の担当者との間のメール連絡は原則として学生が行う。メール送信前には教員が必ず複数回添削し、ビジネスメールの作法について教授する。前述のマナーインストラクターの講習会には教員も参加している。メールを使用する機会が決して多くはない現代学生ならではの課題として、件名や宛名などの欠如がある。
7. イベントの協賛や後援が必要な場合については、新たな協力企業や協力行政との間でも上記 3～6 の工程を行う。Universal Event の場合は東京 2020 大会が推進する参画プログラムへの申請を行い、横浜市港北区が後援となった。港北区にある小学校にてイベントを開催することから、小学校の校長や担任教諭との調整も行う。最終的に、小学校では担任の教諭主導のもと複数の生涯学習の時間の中で障碍について考える単元や、シッティングバレーボールを練習する単元が設けられることになり、Universal Event グループのメンバーも数回小学校を訪れ、共に練習に参加した。これら一連の打ち合わせは学生主導で行う。
8. イベント当日までの間、制作物の作成や当日の進行手順確認などを

行うことはもちろん、現地小学校に入校する車両台数の確認など細かな点をメンバー内・先方で確認する。イベント当日は、裏方に徹し、参加する小学生や担任教諭、ゲストのアスリートらが進めるプログラムが円滑に進むようサポートした (図 6d)。

9. イベント終了後、広報部の学生が東京 2020 大会のアクセシビリティガイドに注意しながらイベントの報告文案を作成し、それを通訳翻訳部の学生が英訳して SNS で発信した。イベントで何をしたのか？を明確にするため、写真やイラストが多く入った活動報告書を作成し、学内に掲示した (図 6e)。



図 6 a: マナー講習会の様子 マナーインストラクターから名刺の渡し方の手本を学ぶ
b: 会議の様子 できる限りの発言に挑戦する
c: プレゼンテーション練習の様子
d: 実際のサポートの様子 円の中心にいる講師を周りで 2 名の学生がサポートする
e: 終了後の報告物 イラストやわかりやすさに配慮する

Universal Event とは異なるが、KEIO 2020 project による未来先導基金の目玉企画として 2018 年、2019 年と 10 数名の学生が英国に渡航している。渡航を希望した学生は選考をクリアした上で教員とともに渡英し、BOA・BPA スタッフとともにロンドン大会のメイン会場である Queen Elizabeth Olympic Park の見学や、スタッフへのプレゼンテーションなどを行っている (図 7a ～

f)。上記のように、渡英前にはプレゼンテーション資料を作り込む過程で多くを学び、英語で議論・ディベートできる技量と知識を得る。



図7 a～c: ロンドン大会のメイン会場となった Queen Elizabeth Olympic Park の見学風景
d～f: 渡英視察中に行われた BOA・BPA とのワークショップでプレゼンテーションする学生ら

5 参加を希望する価値と問われる真価

実際、KEIO 2020 project で活動する学生の多くは体育会やサークルを掛け持ちしている。そういった学生ならではの忙しさがある中で活動してきた軌跡を残す取り組みとして、図8のような修了証を発行している。学内の留学選考や就職活動などへ直接的に活用できるものではないが、在学中の活動を証明する手立てとして、参加した学生へイベント終了後に渡している。こういった配慮も学生にとっては好印象で、一つの価値として捉えられているようである。一方で、学年の進級にともない活動に専念できない、キャンパスが日吉から他へ移動したことにより会議に参加できない、などの意見も散見される。こういった学生らが参加しやすいオンラインの環境整備についても議論を続け、SNS アプリの LINE にある音声参加の機能を用いての遠隔参加や議事録作成を試みている。全ては、KEIO 2020 project が掲げる3つのコンセプトにそった活動を持続することで、英国が主導する事前キャンプボランティアへの接続がスムーズに行われるかどうか真価として問われるだ



図8 修了証の一例

ろう。量・質ともに十分に準備されたサポートによって、両国の当事者らが win-win の関係となるよう入念に準備し、学生にとって有意義な経験となるよう教育プログラムを推進したい。

地域連携について、前述の通り横浜市港北区や日吉商店街との交流も重要である。表1にあるように、横浜市港北区とは区民祭りや公開講座を通して関係性を強化している。また、日吉商店街と協力し、英語版の「ひよしマップ」を作成した(図9)。この作成にも上述の Universal Event で記した手順のようなグループが組織され、メンバーらが日吉商店街にある60近い店舗をひとつずつ訪れている。こういった取り組みの継続によって、商店街を訪れた人々にも英国チームが事前キャンプに訪れることを周知することにつながり、地域と共に活動する大変意義深いものであると考える。一方、塾内の取り組みにも目を向けており、日吉キャンパスのバリアフリーマップを現在作成中である。これまでに推進してきた表1のイベント詳細については他稿に譲るが、

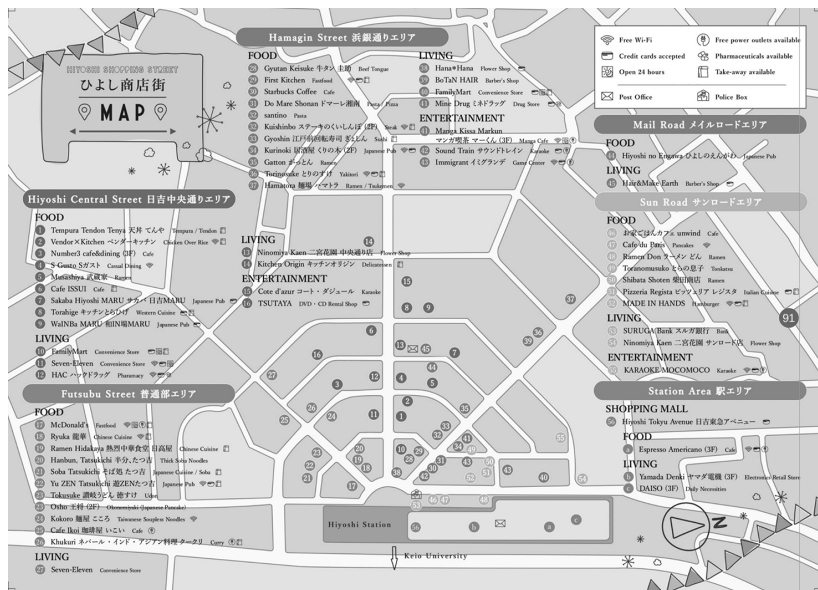


図9 ひよしマップ

ひよしマップやバリアフリーマップなど是有形レガシーのひとつといえる。

6 まとめ

2020年3月、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大にともない、オリンピック・パラリンピック史上前例のない大会の「延期」が決定した。同様に、事前キャンプも予定の変更を余儀なくされる。KEIO 2020 project に参画している学生の一人で、現役学生から唯一ランナーとして選出された聖火リレー (<https://www.keio.ac.jp/ja/news/2020/1/8/27-66826/>、<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/x3t/prs/r5874648.html>) も中止となるなど、多方面で影響が出ている。KEIO 2020 project のことだけ考えると、KEIO 2020 project を入学当初から支え、2020年を4年生として迎えるはずの学生が大会を前に卒業を余儀なくされる無念さは言葉にならない。それでも、「準備期間が増えたとポジティブに解釈」(稲見崇孝, 読売新聞)し、前進し続けるほか道はない。これまで培った【生きる力】を今こそ存分に発揮する時である。

リオオリンピック・パラリンピックをはじめ、これまでに英国チームが事前キャンプを行ってきた状況と同様、学生らは東京 2020 大会組織委員会ボランティアのようないくつかの条件のもとで参加することになる。英国チームから受けるボランティアトレーニングやスタッフとの活動・交流など、多様なベネフィットは考えられるものの、大会や事前キャンプの開催時期によっては授業および試験期間と重なる可能性もある。学業が優先されながらも実りある成果が得られるよう努力を継続しなければならない。そうして得られた成果として、1) 学生主体で行われた多くの無形レガシーが学生の心の中に残り続けること、2) 取り組みが結果として大学のプレゼンスを世界に広め残り続けること、につながることを願いたい。大学の教職員らと共に大学を進歩させた、という感覚が残ることは、愛校心や横浜への帰属意識はもとより self-efficacy の向上にも寄与するであろう。KEIO スポーツレガシーが、延期された東京 2020 大会の次に日本で迎える数十年後のオリンピック・パラリンピックの事前キャンプにおいて同様に組織される学生の道標として長期的に接続されれば幸いである。

参考文献

- 神奈川県 (2019)「東京 2020 オリンピック聖火リレーの詳細ルート及び聖火ランナーを発表します」<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/x3t/prs/r5874648.html> (2019 年 12 月 17 日アクセス)
- 金子史弥 (2017)「ロンドン 2012 オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア政策」『現代スポーツ評論』37, pp. 101-112.
- 慶應義塾大学 (2020)「経済学部 3 年 大類なをみ君が聖火ランナーに選ばれる」<https://www.keio.ac.jp/ja/news/2020/1/8/27-66826/> (2020 年 1 月 8 日アクセス)
- 笹川スポーツ財団「スポーツボランティアに関する調査 2019」<http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1840/Default.aspx>. (2019 年 12 月 2 日アクセス)
- 富士徳文ほか「学生スポーツボランティア団体【KEIO 2020 project】入会時における自由記述アンケート分析」日本体育学会第 70 回大会予稿集, suppl 74, 2019.
- 読売新聞 2020 年 3 月 26 日 (神奈川県版) 稲見崇孝, 五輪延期「準備期間に」内記事, 2020
- British Council (2016) “What are the roles and opportunities for universities before, during and after an international sporting event?” https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/olympic_research_final_research_final_0.pdf (Accessed on November 27, 2017)
- HM Government and Mayor of London (2014) “The long term vision for the legacy of the Olympic and Paralympic Games, Cabinet Office” <https://assets.publishing.service.gov.uk/>

government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/279554/2901513_OlympicLegacyLTV_acc.pdf (Accessed on September, 2019).
Sports England (2016) “Volunteering in an active nation: Strategy 2017-2021, Sport England”
<https://www.sportengland.org/media/11323/volunteering-in-an-active-nation-final.pdf>
(Accessed on September, 2019).

[受付日 2020. 2. 12]